《書　評》

高田幸男編著　東方書店

『戦前期アジア留学生と明治大学』

（武蔵野大学）欒　殿武

本書は明治大学人文科学研究所叢書の一冊として刊行されたもので，同研究所総合研究第一種「アジアの政治社会の民主化と明治大学留学経験についての総合的研究」（2012～14年度）の研究成果である。執筆者６名はいずれも明治大学史資料センターの「アジア留学生研究会」のメンバーである。2010年６月に発足した同研究会は，「近代東アジア人材養成における明治大学・経緯学堂の役割」をテーマに，明治大学と経緯学堂に学んだアジア留学生のデータベースの構築に努め，台湾，韓国の校友会支部等の協力で留学生の帰国後の実績を追跡調査した。

二部構成から成る本書の第一部は，戦前期日本におけるアジア留学生の全体像と明治大学留学生の位置づけに関する総論，第二部は６名の執筆者による各論である。編者の高田幸男氏は，本書のキイ概念を「留学」と「民主化」「留学経験」とし，とりわけ政治哲学者M・オークショットの「知の二分法」に基づき，留学経験を「技術知」と「実践知」に分けて分析の視角としたと明言する。

第一部の総論では，高田氏は日本における従来のアジア留学生研究が中国人留日学生に偏重している事実を指摘し，朝鮮の国費留学生の派遣，植民地時代の台湾からの留学生についての考察を付け加えた。さらに，従来の留学生史を整理し，明治・大正時代から太平洋戦争末期に至る期間の，明治法律学校，経緯学堂，明治大学に関わった留学生史を概説した。

第二部では，まず土屋光芳氏は第一章「清末・民国期の中国人の『留学体験』と政治・社会の民主化――汪精衛と宋教仁，胡適と林語堂，湯良禮と周化人」において，清末に日本留学し，辛亥革命の前後に中国の政治の舞台で活躍した汪精衛と宋教仁，アメリカに留学し，1920～30年代に活躍した胡適と林語堂，イギリスなどに留学し，1940年代初期の汪精衛政権下で活躍した湯良禮と周化人を取り上げ，それぞれ「技術知」と「実践知」の視点から分析した。異なる時代に日本と欧米，それぞれの留学経験がいかに中国の近代に関わったのか，共通の分析手法で考察したことが示唆的である。とりわけ，先行研究の少ない湯良禮と周化人に関する考察は貴重である。

第二章の山泉進氏「師尾源蔵と経緯学堂」は，『駿台新報』と『中華学報』に掲載された師尾源蔵の中国認識及び経緯学堂の設立に関する資料を解説した。師尾源蔵は明治大学射撃部の創設者としての功績が関係者に知られているが，「明治大学講師　中華留学生係」（『日華学報』第19号）としての役割についてはほとんど知られていない。師尾の「中華留学生と明治大学」（『中華学報』に掲載）における経緯学堂主旨などは，資料としての価値が高く，師尾の数々の論説を取り上げた本論は，多くの研究者に刺激を与えたのではなかろうか。

第三章の鳥居高氏「中国人留学生と神田神保町『中華街』の形成と特徴――明治末期を中心に」では，神保町「中華街」の成立と概要を提示し，他の中華街との比較を行い，先行研究を縦軸，自治体の記録や大学史などのデータを横軸に組み合わせた中華街「比較試論」を展開した。著者の神田神保町「中華街」という問題意識には，強く同感する。横浜中華街の観光地化や池袋の「新中華街構想」が話題になっている今，かつて明治大正時代に神田神保町が中華街だったことは，あまり知られていない。神田神保町「中華街」の問題意識は斬新で，かつ先行研究は少なく，意外に研究の盲点と言える。著者の問題提起は歴史の事実を掘り起こす点において意義が大きい。

第四章の鈴木将久氏「胡風の日本留学体験」では，1930年代に東亜高等予備学校と慶應義塾大学

英文科で学んだ胡風を取り上げ，中国人留学生たちの「日本のプロレタリア文芸の受容」に注目しながら，プロレタリア文学運動に参加する胡風の「留学経験」と文芸理論の構築プロセスを考察した。胡風と周揚，二人の文芸理論家の「留学体験」の違いからその文芸理論の相違に焦点を当てたことと，文学研究の視点からアプローチ，この二つの特徴は注目に値する。

第五章の村上一博氏「日治期台湾における台湾人弁護士の誕生」は，日本統治時代に明治大学などに留学した台湾出身の弁護士を取り上げ，台湾における弁護士制度を概観した。訴訟代理人制度から弁護士制度への移行，台北弁護士会の構成員，日本人弁護士の業務執行方法，出張所事務員と通訳の品位の問題および弁護士の政治参加など，幅広く明治と大正時代における台湾の弁護士制度を紹介した。本論は台北律師公會會史委員会監修，王泰升・曽文亮編『二十世紀台北律師公會會史』（台北律師公會，2005年）の内容を踏まえながら，明治大学法科専門部に学んだ蔡式穀，鄭松筠に言及したことが示唆的である。

第六章の高田幸男氏「1930，40年代朝鮮人・台湾人の明治大学『留学経験』」は，2014年に韓国，2015年に台湾で行ったインタビューに基づき，1930，40年代に明治大学で学んだ台湾の辛文炳，曹伯輝，朝鮮の任甲寅，張斗建の４人事例を取り上げ，「留学経験」がそれぞれ彼らの人生にどのような影響を与えたのか考察している。口述史（オーラルヒストリー）の資料は貴重な当事者の実体験として，重要視されている一方，客観性，史実への忠実性など問題視されており，扱いにくい部分があるが，高田氏は，本書の分析手法の「技術知」と「実践知」の視角から切り込んでいる。

総じて本書の最大の特徴は，新しいパラダイムの試みに尽きる。具体的には，次の諸点が挙げられる。

一，「技術知」と「実践知」の分析視点の提示。

二，政治学，文学，法学などの側面から日本に留学した個々の人物を取り上げ，考察したことによる研究の広がり。

三，神田神保町「中華街」という問題意識の提起。

四，日本の統治下にあった朝鮮と台湾からの留学生に注目した，明治大学との関係と個々の実績の再検証。

高田氏による「あとがき」に記された「留学生史・大学史研究に一石を投じる」という言葉が，まさしく立証された好著である。

ただし，従来の留学生史の歴史学的研究方法と異なる視点の提示は評価に値する一方で，第二部の各論において，いささかの問題点・疑問点が散見される感も否めない。

第一章における帰国した中国人留学生を「反日」と「親日」で捉える視点（47頁）や，宋教仁の「大学に入学する一方（学費不足で退学）」（51頁）という事実誤認，第二章では，師尾源蔵が結局どのように中国人留学生たちと関わったのかについて，核心に迫りきれていないのが残念である。第三章は，全体的には先行研究への渉猟は評価できるが，黄尊三の日記以外の一次資料（例えばアジア歴史資料センターの関係資料，明治末期の新聞記事，『宋教仁日記』，『周恩来十九歳日記』，その他のいわゆる「東遊日記」など）の使用が見受けられないのはなぜであろうか。また，神田神保町に住む学生と横浜中華街に住む商人および「三把刀」の従事者は，出身地域・生活習慣・宗教など，それぞれ異なる階層に属する集団であり，現存の中華街を基準にして比較することには疑念が生じる。また，第四章の，魯迅の来日目的を医学による救国（191頁）とする認識，そして郭沫若の世代の留学生を語る際に，速成教育を取り上げる文脈（193頁）は首肯しがたく，第五章は台湾の『二十世紀台北律師公會會史』（台北律師公會，2005年）に拠った箇所と著者の独自調査の部分があいまい

で判別しにくい。

読み手の立場によって，様々な論に対する賛否はあろうが，本書の先駆的な意義については，まぎれもなく高く評価されるべきである。

（2019年３月刊，356ページ，本体3,200円＋税）

中国研究所図書館利用案内

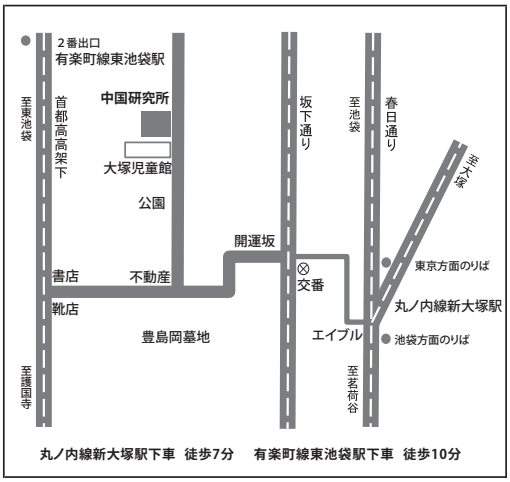
●所蔵資料：

所蔵数は約45,000冊。戦前から現在まで中国において発行された社会科学・人文科学系の図書，定期刊行物を所蔵しています。

●開館日時：月曜日（予約制）午前10時～正午，午後１時～５時

●利用料金：

	閲覧料	複写料
所員	無料	10円
研究会員	無料	20円
一般（団体）	1,000円	100円
一般（個人）	700円	30円
大学生・大学院生	300円	20円
留学生	無料	20円



●利用方法：

書庫は閉架式をとっています。館内備付けのカード目録またはCiNii Books（http://ci.nii.ac.jp/books/）にて請求記号をお調べください。係員が書庫より資料をお持ちします。なお，館外への貸出しは行っていません。

●資料郵送・FAXサービス：

所蔵する図書資料等の複写をご希望の場合は，郵送またはFAXで送付いたします。料金等詳しくはお問い合わせください。

●お問合せ先：

中国研究所図書館
TEL：03-3947-8029　FAX：03-3947-8039
E-mail：c-lib@tcn-catv.ne.jp　URL：http://www.chuken1946.or.jp/